

文春新書

198

# 漢字と日本人

高島俊男



文藝春秋

# 漢字と日本人

高島俊男

文春新書

198

## 高島俊男 (たかしま としお)

1937年生れ、兵庫県相生出身。東京大学大学院修了。中国語学・中国文学専攻。『週刊文春』にエッセイ「お言葉ですが…」を連載中。著書に『李白と杜甫』、『水滸伝と日本人』(第5回大衆文学研究賞)、『三国志 きらめく群像』、『本が好き、悪口言うのはもっと好き』(第11回講談社エッセイ賞)、『漱石の夏やすみ』(第52回読売文学賞)、『メルヘン誕生』、『お言葉ですが…』、『お言葉ですが…②—「週刊文春」の怪』、『せがれの凋落—お言葉ですが…③』、『お言葉ですが…④—猿も休暇の巻』など多数。

## 文春新書

198

かんじ にほんじん  
漢字と日本人

平成13年10月20日 第1刷発行  
平成14年1月5日 第9刷発行

著者 高島俊男  
発行者 東真史  
発行所 藝文藝春秋

〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23  
電話 (03) 3265-1211 (代表)

印刷所 理想社  
付物印刷 大日本印刷  
製本所 大口製本

定価はカバーに表示してあります。  
万一、落丁・乱丁の場合は送料小社負担でお取替え致します。

©Takashima Toshio 2001 Printed in Japan  
ISBN4-16-660198-9

漢字と日本人 目次

第一章 漢字がやってきた 7

1 カテーの問題 7

2 世界でたったひとつの文字 14

3 漢語とはどういう言語か 29

4 不器用な日本人 49

第二章 日本人は漢字をこう加工した 74

1 訓よみとかな 74

2 日本語の素姓 98

3 漢字崇拜という愚 110

第三章 明治以後 128

1 新語の洪水 128

2 翻訳語——日本と中国 144

3 顛倒した言語——日本語 153

4 「歴史」と「進歩」 158

#### 第四章 国語改革四十年 169

1 漢字をやめようという運動 169

2 国語改革とは何だったのか 192

3 当用漢字の字体 213

4 新村出の痛憤 228

#### 終章 やっかいな重荷 240

あとがき 247

# 漢字と日本人

高島俊男

文春新書

198



漢字と日本人 目次

第一章 漢字がやってきた 7

1 カテーの問題 7

2 世界でたったひとつの文字 14

3 漢語とはどういう言語か 29

4 不器用な日本人 49

第二章 日本人は漢字をこう加工した 74

1 訓よみとかな 74

2 日本語の素姓 98

3 漢字崇拜という愚 110

第三章 明治以後 128

1 新語の洪水 128

2 翻訳語——日本と中国 144

3 顛倒した言語——日本語 153

4 「歴史」と「進歩」 158

#### 第四章 国語改革四十年 169

1 漢字をやめようという運動 169

2 国語改革とは何だったのか 192

3 当用漢字の字体 213

4 新村出の痛憤 228

#### 終章 やっかいな重荷 240

あとがき 247



# 第一章 漢字がやってきた

## 1 カテーの問題

数年前、中学生がおさない子どもをつづけざまに殺害した事件があった。それから一年くらい、この中学生がかよっていた学校の校長先生が、ある雑誌にこの事件のことを書いていて、なかにたいへんおもしろいところがあった。——いや、そのおもしろいところというのは、事件とはなにも関係がありません。日本語の問題として、おもしろいところがあった。

ある新聞記者からその中学生に関して何かの質問をされて、校長先生が「それは假定の問題でしょう」と答えた。それが、「校長は家庭の問題だと語った」と報ぜられて、校長先生は誤解をうけ、迷惑をこうむった、というのである。

のっけから恐縮ですが、ちょっと横道にそれますね。右に「假定」と書きました。これは、いま一般には「假定」と書いていることばです。

わたくしは、本を書いたり雑誌に発表する文章を書いたりする際、もちいる漢字は、原則として戦後の当用漢字略字体にしたがっている。戦後略字がいいと思っただがっているわけではない。あれはとりかえしのつかない愚挙であったと思っただがっているのであるが、なにしろ社会一般がすっかりそれになってしまったから、やむなくしたがっている。しかし、どうにも承服できないいくつかの字はしたがわれない。「假定」の「假」もその一つです。

なぜしたがわれないのか。それを申さねばこんどはみなさまが承服してくださらぬであろうから、横道がなくなるけど、ひととおりに申しておきましょう。

「反」という字形をふくむ字は、「反」自体のほか、板、坂、版、飯、叛、返などがグループをなしていて、みなハンという音を持っている（「返」もほんとうはハンなのです。なぜか日本へ来てからヘンに変化しちゃった。こういう、どういうわけかわからないが日本で音がかわって通行しているのを「慣用音」と言っています。でも「返魂香<sup>ほんこんこう</sup>」とか「返魂草<sup>ほんこんそう</sup>」とかだけは本来のハンの音をたもっていますね）。

いっぽう「假」のほうは、この「假」をはじめとして、暇、霞、瑕、葭などがグループで、みなカという音を持っている。このなかの「假」だけを「仮」にして、「板」や「坂」や「飯」のグループの一員のような形にすることは甚だ不都合なのです。みなさんはもう

「仮」になれきっているからそう変だと思わないかもしれないが、もし「休暇」が「休販」ということになったら、これは変だと思うでしょう？ だったら「仮」だって変なのです。そういうふうには、戦後略字を客観的に見る、ということを見なさんがおぼえてくださったから、わたくしとしてはたいへんありがたい。くどくど説明したかいがあった、というものです。

なお、手書きの字ではむかしから「仮」と書く人はいくらもあった。それはいいのです。たとえば文章を書く人が原稿に「假定」と書いておく。「假」という字は書くのによっと手間がかかりますからね。「仮」の字を書いておく。そうすると印刷屋さんがちゃんと「假定」と活字をひろってくれる。そりゃそうだ。むかしは「仮」なんて活字はないんだからね。だから原稿を書く人は安心して、テキトウに略字を書いておく、ということがいくらもありました。「権利」を「权利」と書いてくとか、「裁判」を「才判」と書いてくとか、「日曜日」を「日曜日」と書いてくとか、「聞く」を「聞く」と書いてくとかね。「仮」もそうした略字の一つだったので。それを、「仮」と書いている人が多い、ってんで正式字体にしちゃった戦後の「国語改革」というのはほんとうに愚挙でした（このことはまたあとでも申します）。

## おなじ音のことばがいっぱい

さあ、横道の話がながすぎて本筋はなんであつたかおわすれになつたんじゃないかと思う。はい、校長先生は「それは假定の問題でしょう」と言ったのに、新聞で「それは家庭の問題でしょう」と言ったことにされてたいへん迷惑した、という話でした。

なぜそんな、とんでもないまちがいが生じたのか。

と言っても、これはなにもそうむずかしい問題ではない。「假定の問題」も「家庭の問題」も、口で言い耳で聞けば「カテーノモンダイ」で音がおなじだからだ。アクセントまでおなじである。つまり校長先生は「假定の問題」のつもりで「カテーノモンダイ」と言ったのに、新聞記者はそれを「家庭の問題」と聞きとってしまった。ことが子どもがおこした事件についての話だから、記者が「家庭の問題」と早トチリしたのも無理からぬ点があります。

校長先生と新聞記者の話はそれでおしまいなのですが、「假定」と「家庭」だけではない。ほかに「過程」も「課程」もカテーである。

カテーは一つの小さな例にすぎない。日本語にはこういう、相互に無関係だが偶然におなじ音を持つことばが、何千も何万もある。

この「偶然」というのが重要なところなんです。まったく偶然なんだ。「假定」と「家庭」とは意味の上ではなんの関連もないのに、偶然おなじ音を持ってハチあわせしちゃった。それ

が一つや二つではなく、そんなことばが何千も何万もある、というのが日本語の特性なのである。

まあなんでもいいから適当に音のくみあわせを考えてみてください。たとえば——「コーセン」にしましょうか。これをごくふつうの小型国語辞典でひいてみると、交戦、好戦、抗戦、光線、公選、口銭、工銭、香煎、鉦泉、黄泉、と十のことばがならんでいる。これをひっくりかえした「センコー」をひいてみると、穿孔、専攻、専行、戦功、浅紅、鮮紅、織巧、先考、先行、潜行、潜航、潜幸、遷幸、線香、選考、銓衡、選鉦、閃光、とこちらは十八もならんでいる。無論なかには日常あまりつかわないことばもふくまれているが、よくつかうことばもある。これが「サーコー」であれ「コーサー」であれ、また「サーコン」であれ「コンサー」であれ、ことばの数は多いのやすくないのやいろいろだが事情は同様で、こういうことが無数にあるわけだ。上に「何千何万」と言ったのは決して誇張ではありません。

右に「コーセン」「センコー」と書きました。これは一種の発音記号のつもりです。

日本語のかな表記は、外来語を別として、長音符（ー）をつかわないことになっているので、光線、専攻などは「こうせん」「せんこう」と書きます。しかしこの表記どおりに発音するわけじゃない。つまり「こうせん」「せんこう」の「う」のところを実際に「う」